

CL寓話

イエスマンの返答

David K.Reynolds 著 本多岩夫訳

“Water Bears No Scars” –Western Logic: It’s Gotta Be Yes or No- p153



ソーコ氏は、赤ん坊のような目をした50才の変わった男である。立派な身なりをしているのだが、いつも少しばかり流行遅れであった。それでも彼はニュースメディアでは人気があった。というのは、彼には何か普通とは違った、ニュース性の高い発言が期待できたからである。今朝も彼は、テレビのインタビュー番組で準備された新型の回転椅子に腰かけていた。

二人の攻撃的なインタビュアーが、来るべき核武装解除会談に関する彼の意見を聞いた。インタビュアーの一人は、その会談に賛成であり、もう一人は反対であった。前者は、その会談を支持する論点をいくつか述べた。

「そうです、そこが重要な点です」と、ソーコ氏は答えた。

もう一人のインタビュアーは、会談に反対する論点を述べた。

「確かにあなたは、ご自分が何について話しているか判っておられるようです」と、ソーコ氏は論評した。

最初のインタビュアーは反駁した。

「あなたのおっしゃることは、なるほどと思われます」とソーコ氏は答えた。

第二のインタビュアーは反撃した。

「その点については反対ではありません」

「ごもっとも」

「私自身は、そうだと望んでいました」

とうとう最初のインタビュアーが激昂して言った。

「しかしソーコさん、どうして私たち二人の意見に賛成できるのですか？ 核武装解除の議論は、有益かそうでないかのどちらかです。両方ともということはないでしょう」

「間違いなくあなたの言うことは正しいのです。そのことに関してあなたの論理に何ら間違いはありません」

「では、どちらが正しいとおっしゃるのですか？」とインタビュアーは突っ込んだ。

「そうですね。本当にどっちでしょう？」

「どちらか一方の立場に組みたくないということなんですか？」もう一人が問いただした。

「何故そうしなければならいんです？」とゲストのソーコ氏は知りたがった。

「武装解除の議論に関して、何らかの意見を持たねばならないからです」

「ええ、私は持っていますよ」

「じゃあ、どちらの立場に賛成なんですか？」

「どちらか一方を選ばなければなりませんか？」

「ええ、もちろんです。それがこのインタビューの目的なんですから。どちらかを選んで頂かなければなりません」

「失礼」、ソーコ氏は穏やかに言った。そして立ち上がり、番組のセットから歩き去った。

言うまでもなくカメラマンは、照明を当てたセットからゲストの背中が消えたとき、どうすれば良いか困った。しかしながら二人のインタビュアーは、直ぐにその場をとり繕い、残りの放送時間を、ソーコ氏の思いがけない行動に関する生討論で素早く埋め合わせたのである。

賛成か反対か、本当か嘘か、科学的か非科学的か、東洋か西洋か、善か悪か、資本主義か共産主義か、一私たちの思考は、どちらかに限られた二分法に向かう。現実の世界はあまりにも複雑であるため、このようにイチかゼロかという思考では片づけられない。形式論理学、二進コンピュータ回路といったものは、人間の思考の結果である。このような限定された分野では、二分法的評価は必要であり、適切である。しかし、大学教育とか、精神分析とか、今晚の夕食といったことについて語るとき、どちらかひとつの評論は、ほとんど意味をなさない。

とは言うものの、複雑さの中で、私たちは行動しなければならない。

 [目次へ戻る](#)